



# 目次

---

---

|                       |    |
|-----------------------|----|
| スケジュール                | 04 |
| サンティアゴの道 (世界遺産)       | 05 |
| 世界遺産                  | 06 |
| 歴史                    | 07 |
| いろいろの巡礼道              | 09 |
| 現代の巡礼                 | 10 |
| 歴史街道                  | 11 |
| トゥールーズ ~ ルルド          | 15 |
| サン・セルナン大聖堂            | 16 |
| ルルドの泉                 | 17 |
| 聖ベルナデッタ               | 19 |
| ルルド ~ ログローニョ          | 23 |
| サン・ファン・デ・ラ・ペニャ修道院     | 24 |
| レイレ修道院                | 25 |
| エウナテ (サンタ・マリア礼拝堂)     | 26 |
| 聖フランシスコ・ザビエル          | 27 |
| ログローニョ ~ レオン          | 33 |
| サン・ミジャン修道院 (世界遺産)     | 34 |
| サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダ    | 35 |
| ブルゴス大聖堂 (世界遺産)        | 36 |
| フロミスタ (サン・マルティン教会)    | 38 |
| レオン ~ サンティアゴ・デ・コンポステラ | 39 |
| レオン大聖堂                | 40 |
| バシリカ・デ・サン・イシドロ        | 40 |
| タメイロン村 = 聖フランシスコ・ブランコ | 42 |

---

---

|                                |    |
|--------------------------------|----|
| サンティアゴ・デ・コンポステラ ~ ファティマ.....   | 45 |
| サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂 (世界遺産)..... | 46 |
| サンティアゴ旧市町 (世界遺産).....          | 50 |
| ファティマ ~ リスボン.....              | 51 |
| ファティマの秘跡.....                  | 52 |
| バターリャ修道院 (世界遺産).....           | 55 |
| トマルのキリスト修道院 (世界遺産).....        | 57 |
| メモ.....                        | 59 |



## スケジュール

---

---

| 日付     | ルート                 | 今日     | 今日まで    | 残る      |
|--------|---------------------|--------|---------|---------|
| 13日(火) | 関西 ~ トウールーズ         |        |         |         |
| 14日(水) | トウールーズ ~ ルルド        | 172 キロ | 172 キロ  | 1779 キロ |
| 15日(木) | ルルド ~ ルルド           | 0 キロ   | 172 キロ  | 1779 キロ |
| 16日(金) | ルルド ~ ログローニョ        | 357 キロ | 529 キロ  | 1422 キロ |
| 17日(土) | ログローニョ ~ レオン        | 326 キロ | 855 キロ  | 1096 キロ |
| 18日(日) | レオン ~ サンティアゴ        | 453 キロ | 1308 キロ | 643 キロ  |
| 19日(月) | サンティアゴ ~<br>~ ファティマ | 418 キロ | 1726 キロ | 225 キロ  |
| 20日(火) | ファティマ ~ リスボン        | 225 キロ | 1951 キロ | 0 キロ    |
| 21日(水) | リスボン ~              |        |         |         |
| 22日(木) | ~ 関空                |        |         |         |



# サンティアゴの道

「サンティアゴの道」は、キリスト教の聖地であるスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路である。おもにフランス各地からピレネー山脈を経由しスペイン北部を通る道を指す。



サンティアゴ・デ・コンポステラには、聖ヤコブ(スペイン語でサンティアゴ)の遺骸があるとされ、ローマ、エルサレムと並んでキリスト教の三大巡礼地に数えられている。フランスでは、「トゥールの道」、「リモージュの道」、「ル・ピュイの道」、「トゥールーズの道」の主要な4つの道がスペインに向かっていている。スペインでは、ナバラ州からカスティーリャ・レオン州の北部を西に横切り、ガリシア州のサンティアゴ・デ・コンポステラへ向かう「フランスの道」が主要である。

スペイン語では、「El Camino de Santiago」(サンティアゴの道)または単に「El Camino」(道)と呼ばれる。フランス語では「le chemin de Saint Jacques」(サン・ジャックの道)と呼ばれる。

サンティアゴの道は1987年にヨーロッパ会議によって最初のヨーロッパの文化的な旅程であると公布されました。この道に沿って、およそ1800の大きい歴史的な建物があります。このルートは中世の間にイベリアの半島とヨーロッパの間に文化交流を奨励することにおいて基本的な役割を果たしました。

## 世界遺産

現在のところでは、ユネスコの世界遺産におよそ 830 件が登録されていて、644 件が文化遺産である。その中で、サンティアゴ巡礼路は、フランスとスペインで別々に登録されている。

スペイン側は登録番号 669 (1993 年登録)

巡礼路のうちスペイン国内の道は、1993 年に「**サンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼路**」としてユネスコの世界遺産に登録された。紀伊山地の霊場と参詣道と並び、世界でも珍しい道の世界遺産としても知られている。登録された道は、後述の「フランスの道」と「アラゴンの道」に相当する。

フランス側は登録番号 868 (1998 年登録)

フランスの巡礼路の一部と途上の主要建築物群については、「**フランスのサンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼路**」として 1998 年に別途登録された。



## 登録基準

この世界遺産は、世界遺産登録基準における以下の基準を満たしたと見なされ、登録がなされた。

\* (ii) ある期間を通じて、または、ある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、町並み計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。

\* (iv) 人類の歴史上重要な時代を例証する、ある形式の建造物、建築物群、技術の集積、または景観の顕著な例。

\* (vi) 顕著な普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰、または、芸術的、文学的作品と、直接に、または、明白に関連するもの。

## 歴史

サンティアゴの道の歴史は、9世紀初めにスペインに伝道したイエスの使徒ヤコブの墓が発見されたということから始められた。

使徒ヤコブ（サンティアゴ）はゼベダイとサロメの息子たちの1人でした。彼の兄弟は、伝道師ヨハネ、同じくイエスの使徒でした。

伝統によれば、イエスの死と復活の後、使徒ヤコブはスペインに行きました。そこで（ガリシア州からアラゴン州まで）イエスのメッセージを宣教したが、失敗しました。その間にマリア様は、エbro川のそばで彼の前に現われて、そして彼にその場所に教会を建てることを命じました。



それからヤコブはエルサレムに戻って、そこで44年に、ユダヤ人の王、ヘロデアグリッパ1世の命令によって首を切り取られた。

伝説によれば、使徒ヤコブがエルサレムで殉教した後、彼の弟子はその遺骸を船でエルサレムからイリア・フラヴィア（現在パドロン、サンティアゴ・デ・コンポステラの近く）まで運んで埋葬しました。

813 年、現在のサンティアゴ・デ・コンポステラで、隠者ペラギウスは天使のお告げによりヤコブの墓があることを知らされ、星の光に導かれてテオドミロ司教と信者がヤコブの墓を発見したとされる。これを記念して墓の上に聖堂が建てられた。

サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼の記録は、951 年のものが最古である。11 世紀にはヨーロッパ中から多くの巡礼者が集まり、最盛期の 12 世紀には年間 50 万人を数えた。



この道はサンティアゴまであらゆる人々を導きました。正直な巡礼者、囚人、吟遊詩人、乞食、冒険家、浮浪者、逃亡犯罪人、盗賊。。

信心深い人々は、使徒の墓を訪問するために巡礼をしました。他の巡礼者は、自分自身の困難を克服した後に、使徒にした約束を果たすために旅行をしました。

また他の巡礼者の中には、重い病気の人たちと奇跡的な回復を願うために巡礼する人たちがいました。また教会の権威、あるいは民間の裁判官によって科せられた罰として巡礼をした囚人もいました。

すべての巡礼者が信心深い理由で旅行をしたわけではありません。若干の「巡礼者」は利益を求めました。中には遺言書の条項によって遺産を受け取るためにサンティアゴを訪問することを義務づけられた人たちがいました。

サンティアゴの道は 16 世紀の半ばまで多数の巡礼者を引き付けました。17 世紀に入って、人々が使徒ヤコブのことを忘れ始めましたので、サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼者の数はどんどん落ちました。

更に 19 世紀になると、一日にたった 30~40 人の巡礼者が到着するだけとなってしまいました。このような少ない巡礼者の数の結果として、小道は事実上捨てられたのも同じでした。



しかしこの傾向は、ヴァリニャ神父（ルゴ県のセブレイロ教会司祭）の努力のおかげで、1970 - 1980 年の間に終わりました。



彼は、巡礼の他の崇拜者とともに、ピレネー山脈からサンティアゴまで、ルートに黄色の矢印の印を付け始めました。そして、この困難な仕事を終えると、彼はサンティアゴへの巡礼者のための最初のガイドブックを出版しました。

そのときから巡礼は再開されました。そして、1993 年の聖年（ハコベオ）の年に、スペインとヨーロッパを結ぶルーツを表す巡礼を記念するためにスペイン全土で祝われたのであった。同じ年にユネスコはサンティアゴの道を世界遺産であると宣言しました。これも再開の一因になりました。

しかし、この「再発見」をブームにまでしたのは、ブラジル人作家パウロ・コエーリョが著した一冊の本でした。原題を直訳すると「コンポステラの巡礼者：ある魔法使いの日記（邦題は「星の巡礼」）となるこの本が世界中の人々の興味を呼び覚ましました。

## いろいろの巡礼道

フランスからは、巡礼の中心地であった都市を拠点として 4 つの道がピレネー山脈に向かっている。

- \* トゥールの道（パリからトゥールを通る）
- \* リモージュの道（ヴェズレーからリモージュを通る）
- \* ル・ピュイの道（ル・ピュイから）
- \* トゥールーズの道（アルルからトゥールーズを通る）

トゥールの道、リモージュの道、ル・ピュイの道の 3 つは、オスタバで合流し、ピレネー山脈のイバニェタ峠を経てパンプロナ（ナバラ州）に向かう。トゥールーズの道は、オロロンからソンポルト峠を経てハカ（アラゴン州）に向かう。この二つの道（ナバラ道とアラゴン道）はプエンテ・ラ・レイナで合流し、サンティアゴ・デ・コンポステラに向かうフランスの道と呼ぶ。

このほかに、イベリア半島には次の巡礼路もある。



\* **北の道** スペインとフランス国境に接するイルンからビルバオ、サンタンデル、オビエドを通過してガリシアに向かう海沿いの道。10世紀までこの道が巡礼者数として第一の道でした。

\* **イギリスの道** - 海路でフェロルまたはア・コルーニャに上陸し、サンティアゴ・デ・コンポステラに向かう。

\* **ポルトガルの道** - ポルトガルのポルトからパドロンを通過してサンティアゴ・デ・コンポステラに向かう。

<<<<\* **銀の道** - セビリャからメリダ、カセレス、サラマンカ、サモラ、オウレンセを通過してサンティアゴ・デ・コンポステラに向かう。もともとは古代ローマ時代の道である。

## 現代の巡礼

現在、サンティアゴ・デ・コンポステラを目指す巡礼者は毎年数万人に上る。その多くは徒歩で、自転車を使う人もいる。少数ながら中世のように馬やロバを使う人もいる。信仰のためだけでなく、観光やスポーツ、単なる目標達成のために歩く人もいる。車や鉄道、バスで移動することもできるが、巡礼路は線路や国道に沿っていない道も多い。また、サンティアゴ・デ・コンポステラで証明書がもらえる人は、徒歩で100km以上、自転車で200km以上という条件がある。



ホタテガイは、巡礼のシンボルとなっている。巡礼者は巡礼の証としてホタテガイをぶら下げて歩く。また、水筒代わりに瓢箪（ひょうたん）を持つ。

巡礼者はさまざまな道をたどるが、人気があるのは「フランスの道」である。出発地としては、ロンセスバリェスを選ぶ人が多い。伝統的なフランスの町（ル・ピュイ、アルル、トゥールなど）から出発する人や、さらに遠くからフランス内の道を目指す人、中世になって自分の玄関から出発する人もいる。ピレネー山脈からすべて歩くと 800～900km の距離で、1 日平均 30km 歩くと約 1 か月かかる。

## 歴史街道

中世以降、サンティアゴ巡礼が増えるにつれて教会の建設も盛んになった。そしてその建築を通じてピレネー山脈の向こう、フランスをはじめとするヨーロッパの美術様式がスペインに伝えられるようになった。だがその伝播はヨーロッパからスペインへの一方通行的なものではなく、スペインの持つイスラム的要素もサンティアゴの道を介して他のヨーロッパ諸国に紹介された。サンティアゴの道はこうした美術様式、芸術の交流の場であったとも言える。

### (i) ロマネスク様式

まず最初に伝わったのがロマネスク様式である。11 世紀から 12 世紀にかけておこったロマネスク様式の教会建築における特徴は石造天井と半円筒アーチであり、重厚・荘重な印象を与える。このロマネスク様式の代表的なものは八カ、フロミスタの教会建築とレオンの壁画である。

八カのカテドラルの建築は 11 世紀後半に始まるものである。フロミスタのサン・マルティン教会はスペイン・ロマネスクの傑作として名高い。その教会を飾る幾百の彫刻には思わずためいきがでる。レオンのバシリカ・デ・サン・イシドロ（教会堂）には天井一面描かれたフレスコ画がある。聖書と狩りを題材にしている。



ロマネスク様式は、単に教会建築を盛んにしただけではありません。旅館、病院、橋などが道に沿って建てられた。

## (ii) ゴシック様式

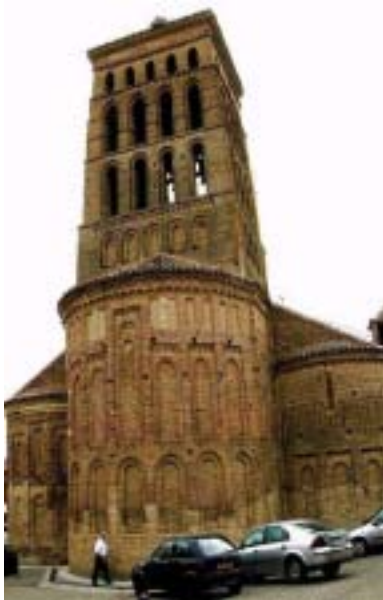
13世紀にはいるとフランスからゴシック様式が伝わる。尖頭アーチと穹窿天井、広い窓などがその特徴であり、教会の大規模化も可能にした。その代表がブルゴスとレオンのカテドラルである。

まずブルゴスのカテドラルは 1221 年に礎石が据えられて以来、完成までに約 300 年もの歳月が費やされている。

レオンのカテドラルは別名サンタ・マリア・デ・レグラとも呼ばれている。13世紀後半に建てられたこのカテドラルはゴシック建築の理想像ともいべき優雅な構成で知られている。そしてその 130 ヶ所、あわせて 1700 平方メートルに及ぶステンドグラスは華麗としかいいようがなく、特に夕陽赤く染まったときには畏敬の念すら感じる。

## (iii) ムデハル様式

サンティアゴの道沿いの教会建築はヨーロッパ指向一辺倒ではない。8世紀に亘るイスラム統治の影響はムデハル様式という形態を生みだした。これはレコンキスタによりカトリックの支配下となった土地に住んだイスラム教徒たちの伝統がロマネスクやゴシックに融合して生まれたものである。レンガ積みによる建築が特徴であり、その代表的なものがサアグンのサン・ロレンソ教会である。



## (iv) サンティアゴ・デ・コンポステラの大聖堂、そしてモデルニスモ

ロマネスク様式のところでは触れなかったが、サンティアゴ・デ・コンポステラの大聖堂は 11 世紀後半から 12 世紀にかけて建てられたロマネスク様式の教会である。後年、増築、改築の際にゴシック、ルネッサンス、そしてバロックとそれぞれの様式が加わり、サンティアゴの道の建築史を体現している。

「オブラドイの門」は左右に高さ 70m の塔をもつカテドラルの正面玄関で、スペイン・バロックの代表的作品でもある。この中にあるのがロマネスクの華と呼ばれ、当時の正面玄関だった「栄光の門」である。内部の回廊は 16 世紀につくられたゴシックとルネッサンスの混合、カテドラルに隣接する 73m の時計塔は 17 世紀のバロック様式といった具合である。

また今は巡礼道博物館となっているアストルガの司教館は天才ガウディの設計によるモデルニズム様式の建物である。



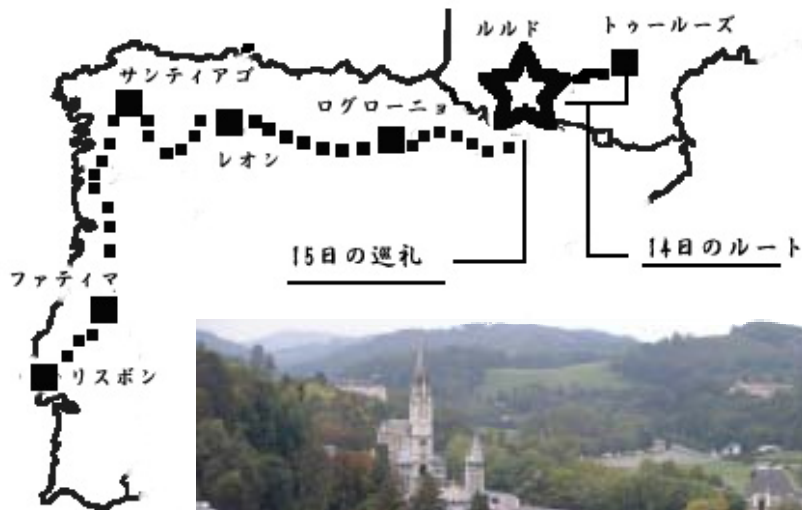


行きましょう。。。

2008年5月14日～15日

## トゥールーズ ～ ルルド

今日の巡礼： ルルドの泉、ルルドの聖母御出現 150周年記念



サン・セルナン大聖堂（14日）



## サン・セルナン大聖堂

---

250年に異教徒の司祭によって迫害された聖セルナンはトゥールーズの最初の司教でした。4世紀に、聖セルナンの墓の上に聖堂は建てられ、同じ場所に、現在のサン・セルナン大聖堂が1080年から1120年の間にロマネスク様式の建物として建てられました。

昔からこの聖堂で重要な遺物が見られることができたので、サンティアゴ・デ・コンポステラへ行く巡礼者のためにこの場所は有名な寄留地になり、現在の建物はこれらの巡礼者を受け入れるために築られました。というのは、他の古い聖堂より大きいからです（縦115m - 横64m - 天井21m）。この大きさはロマネスク様式の聖堂の中でも極めて大きいものです。



大聖堂には、1888年に作られた大きいパイプオルガンが見られます。これはフランスで最も重要なパイプオルガンの1つであると考えられます。



1860年に、Viollet・le・Ducによって大聖堂の改修工事を行いました。現在、原形を回復するために再び改修されています。

## ルルドの泉

---

1858年2月、村の14歳の少女ベルナデッタ・スプルーが郊外のマッサビエルの洞窟のそばで薪拾いをしているとき、初めて聖母マリアが出現したといわれている。聖母を見たというベルナデッタは、教会関係者はじめ多くの人々から疑いの目を持って見られた。



しかしベルナデッタが、聖母マリアが自分を「無原罪の御宿り」とであると、ルルドの方言で告げた。それは「ケ・ソイ・エラ・インマクラダ・カウンセプシウ」(QUE SOY ERA IMMACULADA COUNCEPCIOU = 私は無原罪のやどりである)という言葉であった。これをベルナデッタは神父に告げた。これによって神父も周囲の人々も聖母の出現を信じるようになった。なぜなら「無原罪の御宿り」は「無学なベルナデッタが知るはずのない」教会用語だったからである。

ただし「無原罪の御宿り」が教義として公認されたのは1854年であって、その教義の通りにわずか4年後にルルドに聖母マリアが出現したのである。

以後、聖母がこの少女の前に18回にもわたって姿を現したといわれ評判になった。1864年には聖母があらわれたという場所に聖母像が建てられた。この話はすぐにヨーロッパ中に広まったため、はじめに建てられていた小さな聖堂はやがて巡礼者でにぎわう大聖堂になった。

以後、ベルナデッタ自身は聖母の出現について積極的に語ることを好まず、1866年にヌヴェール愛徳修道会の修道院に入って外界から遮断された静かな一生を送った。彼女自身は自分の見たものが聖母マリアであったと言ったことは一度

もない。後に尋ねられた時には「(ルルドに聖母が現れ、奇跡の泉があるという)あの話に本当のことは何もありません」と否定したとも伝えられる。彼女自身、気管支喘息の持病があったが一度もルルドの泉に行くことはなく、より遠方の湯治場へ通っていた。肺結核により35歳で(1879年4月16日)病没し、1933年に列聖されている。彼女の遺体は今もって腐敗せず、修道女の服装のまま眠るようにヌヴェールに安置されている。

遺体は1909年、1919年、1925年の3回にわたって公式に調査され、特別な防腐処理がなされていないにもかかわらず腐敗が見られない事が確認されている。

現在では、ルルドの聖母の大聖堂が建っており、気候のよい春から秋にかけてヨーロッパのみならず世界中から多くの巡礼者がおとずれる。マッサビエルの洞窟から聖母マリアの言葉どおり湧き出したといわれる泉には治癒効果があると信じられている。「奇跡的治癒」の報告は多いが、中にはカトリック教会の調査によっても公式に認められた「科学的・医学的に説明できない治癒」の記録さえ数例ある(カトリック教会が「奇跡的治癒」を認めることはまれであり、認定までに厳密な調査と医学者たちの科学的証明を求めている。但しいずれも当時の医学水準に基づくものである)。



## 聖ベルナデッタ

---

ルルドの聖ベルナデッタをご覧ください。1925年、落ち窪んだ眼と鼻、黒ずんだ顔と手をおおい隠すために良質の蠟のマスクがかぶされました。

ベルナデッタは、つましい家庭に生まれた。家族の生活は、徐々に極貧の状態に陥っていった。その中で、ベルナデッタは常に病気がちな子どもであった。ごく幼い頃からすでに胃が悪くて苦しんでいた。度々喘息の激しい発作に見舞われた。健康が思わしくないために、修道生活への道は閉ざされているように思われた。フォルカード司教がベルナデッタをヌヴ



エール愛徳修道会に受け入れてはと提案したとき、総長メール・ルイズ・フェランは、「司教様、彼女は修道院の病室の大黒柱になるでしょう」と答えた。

短い生涯の間に、彼女は少なくとも三度、病者の塗油の秘跡を受けた。彼女は喘息だけではなく、肺結核をはじめ、右膝結核性関節腫瘍．．．等に徐々に冒されていった。1879年4月16日、水曜日、痛みはその激しさを増した。彼女は、たびたび呼吸困難に陥り、そして15時15分頃、ベルナデッタは息を引きとった。

ヌヴェール市当局の許可を得て、ベルナデッタの遺体は4月19日の土曜日まで安置され、人々の崇敬を受けた。サン・ジルダールの修道女たちは、司教の同意を得て、市当局に、ベルナデッタの遺体を修道院の中庭にある聖ヨセフ小聖堂に葬る許可を求めた。1879年4月25日に埋葬の許可が与えられ、4月30日にニエーヴル県知事が埋葬場所について承認した。早速、地下墓地をととのえる作業が始められた。1879年5月30日にひじょうに簡単な儀式が行われ、ベルナデッタの棺は聖ヨセフ小聖堂の地下墓地に安置された。

## 第一回「遺体鑑定」1909年9月22日

1909年の秋、ベルナデッタの聖性、諸徳、奇跡についての、教区長による調査が完了した。引き続き、最初の「遺体の鑑定」と呼ばれるものが、行われなければならなかった。それは、民法と教会法にもとづいて、遺体がベルナデッタ自身のものであることと、遺体の状態を確認するためである。この最初の遺体の発掘は、1909年9月22日（水）に行われた。

遺体の鑑定が行なわれた場所で棺の横に、ベルナデッタの遺体、あるいは状況によって遺骨を置くために、白布でおおわれたテーブルが準備されていた。木製の棺のねじが抜かれ、さらに鉛の棺が切り開かれる．．．そのとき、完全な状態で保存されている30年前に亡くなられたベルナデッタの遺体が現れる。腐臭はまったく感じられない。

ベルナデッタの遺体が完全に保存されていたということは、必ずしも奇跡的な出来事だというわけではない。ある種の土壌においては、遺体が長期にわたって保存され、徐々にミイラ化していくことはよく知られていることである。しかし、ベルナデッタの場合、そのミイラ化の状態は驚嘆に値するものであると言い得る。上記のような条件とは逆に、亡くなったときの彼女の病気と体の状態、聖ヨセフ小聖堂の地下墓地の湿気（修道服は湿気を帯び、ロザリオはさびつき、十字架は緑青色になっていた）等々、すべては肉体をたやすく腐敗させ、分解させる要因になり得たように思われる。

## 第二回「遺体鑑定」1919年4月3日

1913年8月13日、教皇ピオ10世は、ベルナデッタ・スピルーの列福調査および列聖調査に入ることを許可し、「尊者の称号を与える教令」に署名した。しかし、戦争が勃発したため、直ちに調査の手続きに入ることはできず、1918年まで待たなければならなかった。



「尊者」ベルナデッタの遺体の鑑定を、再度行うことが必要であった。1919年4月3日に、この鑑定が行われた。

ひじょうに大切なことは、遺体の鑑定を行った後、医師たちがそれぞれ別の部屋で、互いに相談し合うことなく、報告書を作成したことである。その二つの報告書の内容は、相互にまったく一致し、しかも1909年の博士たちの報告書とも完全に合致している。

今回は、遺体の状態に関してひとつの新しい事実が見られた。それは、「所々にかびと、カルシウム塩と思われる塩の層」が現れていたことである。それは、恐らく第一回目の発掘のときに、遺体を「洗った」ために生じたものであると考えられる。

### 第三回「遺体鑑定」および遺物の摘出。1925年4月18日

1923年11月18日、教皇はベルナデッタの諸徳が英雄的なものであることを宣言した。これによって、列福への道が開かれた。この列福の宣言のために、三回目で最後の「遺体の鑑定」が必要とされた。今回の発掘の間に、ローマ、ルルド、修道会の支部修道院に送られるために、「遺物」が摘出された。この儀式は、ベルナデッタの死後46年後の1925年4月18日に行われた。それは、列福の宣言がまだ行われていなかったため、教会法の定めにしたがって私的なものとして行われた。

外科医は、特に肝臓の保存状態に驚嘆した。「今回の調査でひじょうに心を打たれたことは、明らかに、骨格、腱膜、靭帯、皮膚が完全に保存されていること、筋肉の弾力性と引き締まった状態、特に死後46年も経過しているにもかかわらず、肝臓がまったく予期していなかったほど良好な状態のまま保存されていたことである。この器官は本質的にもろく、柔らかいために、ひじょうに速やかに分解するか、あるいは石灰化して固くなる可能性があると考えられる。しかし、遺体を切開したとき、それは柔らかかでほとんど普通の状態であった。わたしは、そこにいた人々に、これがごく自然の現象であるとは思われないことを、指摘した。」

外科的な作業を終えてから、コント博士は、顔と手だけを残して遺体を包帯で巻いた。このとき、正確に顔の型がとられた。それは、パリのピエール・イルマン社で、その型および数枚の本物の写真をもとにして、薄い蠟のマスクを作るためであった。それは、遺体はミイラ化しているとはいえ、黒ずんだ顔、落ち込んだ瞳と鼻が、人々に不快な印象を与えるのではないかと懸念されたから

である。同様の理由で、手の型がとられた。棺の中の手の位置を全然変えないように、注意深く処置がなされた。

1925年6月14日、教皇ピオ十一世は、ベルナデッタを「福者」として公に宣言した。しかし、リヨンのアルマン・カイヤ・カトゥラン社の工房でつくられていたガラスの棺がまだ完成していなかったため、ベルナデッタの遺体をその棺に納めるのは、7月18日まで待たなければならなかった。その日に行われた儀式は、ひじょうに簡素なものであって、遺体はガラスの棺に安置された。

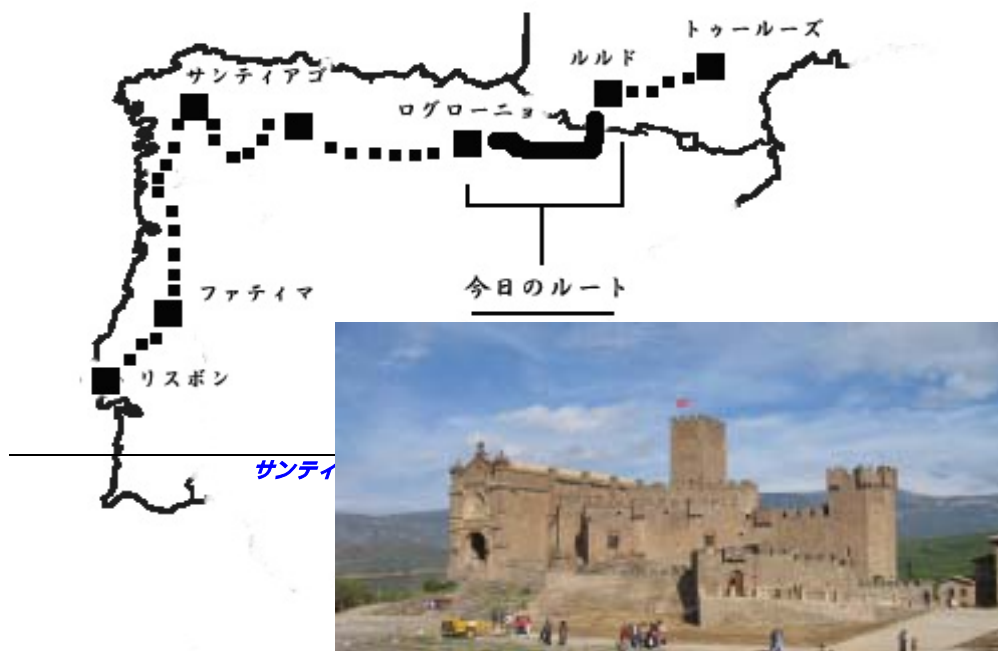
8月3日の夕方、ガラスの棺は、荘厳にサン・ジルダール修道院の大聖堂へと移された。8月4日、5日、6日は、新しい福者をたたえる荘厳な三日間であった。この3日間をきっかけに、聖ベルナデッタの友である人々が、次々と巡礼にやって来るようになった。



2008年5月16日

## ルルド ~ ログローニョ

今日の巡礼： 聖フランシスコ・ザビエル生地、ザビエロ城



< 今日も >

サン・ファン・デ・ラ・ペニャ修道院、  
レイレ修道院、  
プエンテ・ラ・レイナ、エウナテ教会



## サン・ファン・デ・ラ・ペニャ修道院

サン・ファン・デ・ラ・ペニャ修道院はサンティアゴの道に沿って見られる最も古い修道院の1つです。それは、ハカ市（元アラゴン王国の首都）の近くに位置しています。元来、それはイスラム教の侵略の間に追われたキリスト教人のための避難所でした。ザラゴザ県でアラブの部隊から逃れたキリスト教人はいくつかの小さいチャペルを設立しました。それは修道院の起源であった。842年に修道院は再建されて、そして聖別されました。





920年に、アラゴンの伯爵ガリンド2世は、そこで、聖ジュリアンと聖バシリサの修道院を設立しました。そして、その上に、11世紀に、サンチョ・ラミレス（アラゴンの2番目の王）は、クリューニの修道院として、サン・ファン・デ・ラ・ペニャ修道院を作りました。彼はそれを貴族の墓地として計画したので、この場所に埋葬された、莫大な寄付をしたアラゴンとナバーラの貴族の墓を見ることができます。そして、18世紀にカルロス3世によって国王のパンテオンが作られました。

12世紀に作られた、ロマネスク様式の回廊は修道院の最も重要な部分です。そしてそれは山の岩の下で守られており、このような形では世界中で唯一の回廊です。

1675年に火事が起きました。食堂、ゲストハウス、記録文書保管所などが燃えてしまいました。そのため、修道士が近いところに新しい修道院を作って移動しました。

## レイレ修道院

---

レイレ修道院は、ナバーラの歴史に密接な関係がある、スペインで最も美しい修道院のひとつです。そして、疑う余地がないほどその地域の文化の中心でした。詳しい日付の証拠がありませんが、修道院は、851年にさかもどる書類によると、10世紀末にアルマンゾルの兵隊が前ロマネスク様式建設の修道院を破壊しました。

その後、多くの国王の寄付によって1022年に再建され始め、そのオリジナルの壮麗さを取り戻しました。そして、サンチョ・ガルシアの統治の間にこの修道院は最も大きな栄光の時代に達しました。



## エウナテ

---

エウナテにあるサンタ・マリア礼拝堂は、行き倒れた巡礼者を葬るための墳墓聖堂でした。12世紀に巡礼者の救護所教会としてテンプル騎士団によって建造され、エレサレムの聖墳墓教会と同じ八角形をしたロマネスク様式の建物で、その周りを列柱のアーケードがとり囲んでいます。





フエンテ・ラ・レイナ

## 聖フランシスコ・ザビエル

フランシスコ・ザビエルは、  
カトリック教会の宣教師でイエズス会の創設メンバーの1人。  
1549年に日本に初めてキリスト教を伝えたことで特に有名だが、  
日本だけでなくインドなどでも宣教を行いました。



ザビエルは1619年10月25日教皇パウルス5世によって列福され、1622年3月12日盟友イグナチオ・ロヨラと共に教皇グレゴリウス15世によって列聖された。

ザビエルはカトリック教会によってオーストラリア、ボルネオ、中国、東インド諸島、ゴア、日本、ニュージーランドの守護聖人とされている。カトリック教会の聖人で、記念

日は12月3日。

## 青年期まで

1506年4月7日生まれ of ザビエルは、スペイン、バスク地方、パンプローナに

### ザビエル城

ザビエル城は、13世紀の頃すでにナバーラ王国の東端に建っていた。イベリア半島にある他の城同様におもに回教徒軍の攻撃を防いで国を守るという戦略上の目的で建てられた。15世紀に城はザビエルの祖父の所有となり、そこで生まれた母マリアは城を持参金のひとつとしてヨアン・デ・ヤスと結婚し、城はザビエルの父のものとなった。そして1506年フランシスコは6人兄弟の末子としてその城に生まれました。

1512年、スペイン軍がフランスと戦うという口実のもとにナバーラを占領した。ザビエル家はもちろんのこと、ナバーラ人の大部分は反対したが、3年後の1515年、700年前からのナバーラ王国は初めてスペインのものになった。翌1516年、城はナバーラ人の暴動を防ぐため、家族の住みだけを残して、枢機卿シスネロスの命令によって破壊されてしまいました。そのとき、フランシスコ・ザビエルは10歳であった。

1892年に、ヴィヤエルモサ女公爵によって復興されて、元の形に戻りました。そして、1901年に、城の側でフランシスコ・ザビエル聖堂の落成式を行ないました。

近いザビエル城で地方貴族の家に育った。彼は5人姉弟の末っ子で、父はファン・デ・ハツソ、母はマリア・アスピルクエタという名前であった。父はナバーラ王国の宰相であった。彼が誕生した頃、すでに父は60歳を過ぎていた。ナバーラ王国は小国ながらも独立を保ってきたが、フランスとスペインの紛争地になり、1515年についにスペインに併合される。この後、ザビエルの一族はバスク人とスペイン、フランスの間での複雑な争いに翻弄されることになる。このように物心ついたころから戦乱の日々を生きていたフランシスコは聖職者を志すことになる。

1525年、19歳で名門パリ大学に留学。バルバラ学院に入り、そこで自由学芸を修め、神学を学んでいるときにピエール・ファーヴルに出会う。さらに同じバスクから来た中年学生イニゴ（イグナチオ・デ・ロヨラ）との出会いがザビエ

ルの人生を変えることになる。ザビエルはイグナチオから強い影響を受け、俗世での栄達より大切な何かがあるのではないかと考えるようになった。



1534年8月15日、イグナチオを中心とした7人のグループは、モンマルトルにおいて神に生涯をささげるといふ同志の誓いを立てた。その中にザビエルの姿もあった。これがイエズス会の起こりである。1537年6月ベネチアの教会でピンセンテ・ニグサンティ司教によって、ザビエルはイグナチオら5人と共に司祭に叙階される。彼らはエルサレム巡礼の誓いを立てていたが、国際情勢の悪化で果たせなかった。

## 東洋への出発

当初より世界宣教をテーマにしていたイエズス会は、ポルトガル王ジョアン3世の依頼で、会員を当時ポルトガル領だったインド西海岸のゴアに派遣することになりました。ザビエルはシモン・ロドリゲスと共にポルトガル経由でインドに発つ予定であったが、ロドリゲスがリスボンで引き止められたため、彼は他の3名のイエズス会員（ミセル・パウロ、フランシスコ・マンシリアス、ディエゴ・フェルナンデス）と共に1541年にリスボンを出発しました。ザビエルはアフリカのモザンビークで秋と冬を過ぎて1542年5月6日ゴアに到着しました。同地に3年滞在し、そこを拠点にインド各地やマラッカなどに赴いて宣教活動を行い、多くの人々をキリスト教に改宗させました。

ザビエルはインドからマラッカに渡って、そこで 1547 年 12 月に会ったのが鹿兒島出身のヤジロウ（アンジローとも）という日本人であった。ヤジロウの話聞いたザビエルの心の中で、まだキリスト教の伝わっていない日本に赴いて宣教したいという気持ちが強くなりました。

## 日本を目指し、そして到着

ザビエルは 1549 年 4 月 15 日、イエズス会員コスメ・デ・トーレス神父、ファン・フェルナンデス修道士、マヌエルという中国人、アマドールというインド人、およびゴアで洗礼を受けたヤジロウら 3 人の日本人と共にゴアを出発、日本を目指した。

中国のジャンク船に乗った一行は上川島を経て 1549 年 8 月 15 日（カトリックの聖母被昇天の祝日にあたる）に鹿兒島（現在の鹿兒島市祇園之洲）に上陸しました。1549 年 9 月には伊集院の一宇治城で薩摩の領主島津貴久に謁見し宣教の許可を得ました。ザビエルは鹿兒島で布教する日々の中で、福昌寺の住職、忍室（にんじつ）との宗教論争を行ないました。ここで後に日本人初のヨーロッパ留学生となる鹿兒島のベルナルドなどに会いました。



1550 年になると、かねてから都に上ることが目標であったザビエルの一行は、島津貴久のはからいで平戸へ向かうことができました。そこでも宣教活動を行っていたが、ザビエルは平戸の信徒の世話のためにトーレス神父を残して、鹿兒島のベルナルド、フェルナンデス修道士と共に都を目指した。

## 京都から山口へ

1550年11月、山口に着いた一行は、なんとか領主の大内義隆に謁見できることになりました。が、男色を罪とするキリスト教の教えに大内が激怒したために山口を離れ、岩国から海路堺へと赴いた。堺では幸運にも豪商の日比屋了珪の知遇を得ることができた。了珪の助けによって1551年1月、一行は念願の京に到着しました。京都では了珪の紹介で小西隆佐の歓待を受けました。日本国内での活動は了珪の邸宅の一部を借りて行われました。その場所が現在では「ザビエル公園」（大阪府堺市）として市民に開放されており、彼の宣教活動を顕彰する碑が建てられています。

ザビエルは京で「日本国王」に謁見し、布教の許可を得れば全国での布教が自由になると考えていたが、京は戦乱で荒れ果て、足利幕府の権威は失墜しており、後奈良天皇が住まれる御所も荒れ放題であった。ザビエルは比叡山で僧侶たちと論戦を試みたかったが、比叡山から拒絶された。天皇への拝謁も献上品がなければかなわないことを知ってあきらめたザビエルは滞在わずか11日で失意のうちに京都を去ることになりました。

1551年3月に平戸に戻ると、残っていた贈り物用の品々をもって山口へ向かい、再び領主の大内義隆に拝謁した。それまでの経験で、どこでも貴人と会見する時は外見が重視されることを知っていたザビエルは一行を美服で装い、珍しい文物を大内義隆に献上した。大内義隆は喜んで布教の許可を与え、ザビエルたちのために住居まで用意した。山口で布教しているとき、ザビエルたちの話を座り込んで熱心に聴く目の不自由な琵琶法師がい



た。彼はキリスト教の教えに感動し、ザビエルに従った。彼が後にイエズス会の強力な宣教師となるロレンソ了斎である。

## 再びインドへ \* ザビエルの最期

1551年9月、ポルトガル船が豊後に入港したという話を聞いて、ザビエルは豊後に向かった。同地で22歳の青年領主大友義鎮に謁見している。日本滞在も2年になり、ザビエルはインドからの情報がないのが気になっていたため、ここで一度インドに戻ることを決意し、トーレスらを残して出発、中国の上川島を経てインドに向かった。このとき、ザビエルは日本人青年4人を選んで同行させた。それが鹿児島島のベルナルド、マテオ、ジュアン、アントニオの4人である。

1552年2月、インドのゴアに到着。司祭の養成学校である聖パウロ学院にベルナルドとマテオを入学させた。マテオはゴアで病死するが、ベルナルドは学問を修めてヨーロッパに渡った最初の日本人となった。

1552年4月、日本布教のためには日本文化に大きな影響を与えている中国にキリスト教を広めることが重要であると考えていたザビエルは、バルタザル・ガーゴ神父を自分の代りに日本へ派遣し、自分自身は中国入国を目指して8月上川島に到着した。しかし中国への入国はできないまま、体力も衰えていたザビエルは精神的にも消耗し、病を得て12月3日上川島でこの世を去った。46歳であった。

遺骸は上川島で一度埋葬された後、マラッカを経てゴアに移され現在はボン・ジェズ教会に安置されているが、遺体の一部は、ローマ・ジェズ教会に移された。

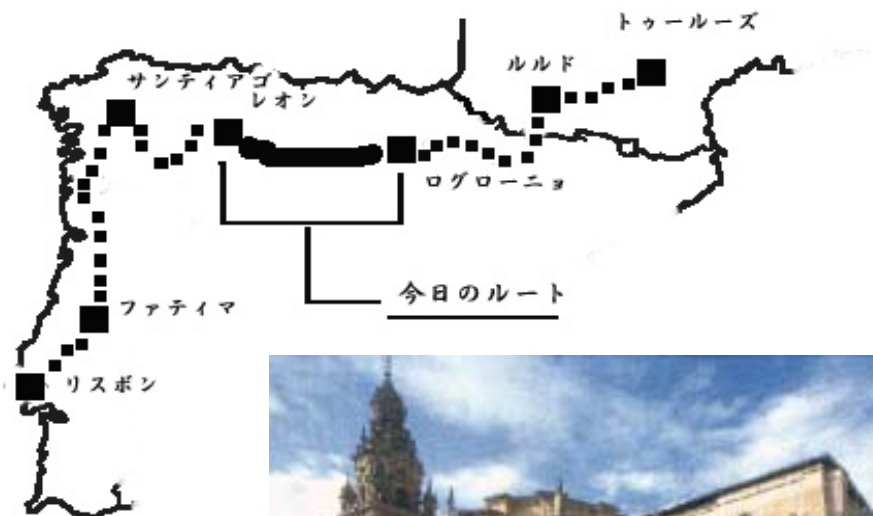




2008年5月17日

## ログローニョ ~ レオン

今日の巡礼： サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダ



サンティ

< 今日も >

サン・ミジャン修道院（世界遺産）、  
ブルゴス大聖堂（世界遺産）、  
フロミスタのサン・マルティン教会



## サン・ミジャン・デ・ラ・コゴジャの修道院「スソ・ジュソ」

サン・ミジャン・デ・ラ・コゴジャ村 (San Millan de la Cogolla) では、2つの壮大な、そして歴史的な修道院「スソとジュソ」が見ることができます。1997年に、このふたつの修道院は、その歴史的、芸術的、宗教的、そして文学的な理由で、人類の遺産であると宣言されました。カスティリヤの言語（スペイン語）はそこで生まれました。

Suso（スソ）という名前はラテン語の「sursum」から出てきます。それは「上へ」を意味します。そして、Yuso（ジュソ）というのはラテン語の「deorsum」からの言葉で、「下へ」を意味する



スソ修道院の起源は5世紀にさかのぼります。伝説によれば現在の回廊がある所に洞穴があって、そこで聖ミジャンが隠者として生活してのち、574年、そこに埋葬されました。そこで6世紀に建てられた聖堂が、まだ見られるのです。

聖ミジャンの名にちなんで名を付けた村の人々は、教会がミジャンを聖人であ

ると宣言する前に、すでに宣言していました。そして、彼を記念するためにサン・ミジャン修道院は築かれました。結果として、聖ミジャンの墓参りに来た巡礼者の絶え間ない流れがありました。そしてサン・ミジャン・デ・スソ修道院はよりいっそう重要になりました。

2 番目のサン・ミジャンの修道院ジュソは、同じく有名な起源を持ちます。11 世紀にガルシア・サンチェス国王はナヘラ市でサンタ・マリア・ラ・レアルの修道院の建設を命令しました。王と司教、そして貴族は、聖ミジャンの遺物をこの教会に移動することが都合よいと考えました。そして王がそれを実行しようとしたとき、意外なことが起きました。

聖ミジャンの遺物を運ぶ雄牛が、途中のある所で突然止まってしまいました。そして誰ひとりとして、止まってしまった雄牛を前にも後ろにも動かすことができなかつたのです。王はそれが神のメッセージであったことを理解して、その場所にもう一つの修道院を建てることを決めました。その場所というのが、サン・ミジャン・デ・ジュソ修道院です。

ジュソ修道院はその大きさで有名です。また異なった建築様式が結合しています（ルネッサンス様式、バロック様式、...）。11 世紀に建設されて、16 世紀、17 世紀、そして、18 世紀にわたってたびたび再構築されましたので、何世紀もの建築様式をみることができます。

## サント・ドミンゴ・

## デ・ラ・カルサーダ

町の名に冠せられている聖ドミンゴは、1019 年に羊飼いの息子として生まれました。

サンティアゴ・



修道士となった後に、サンティアゴへの巡礼者のために、オハ川に架かる橋、ナヘラから約 30 km に及ぶ石畳の道などをひとりで築き上げました。

すばらしい大聖堂には、彼が祀られています。

## ブルゴス大聖堂

---

“天使の業”と讃えられたスペイン・ゴシック建築の傑作”

ブルゴス大聖堂はスペインで最も重要な建物のひとつですし、  
世界中で最も美しいもののひとつです。

それは 1984 年 10 月 31 日にユネスコによって  
「人類の遺産」であると宣言されました。

「人が造ったものではない。天使の業だ」と 16 世紀、スペイン国王フェリペ 2 世は、ブルゴスの大聖堂を見て、こうつぶやいたという。それほど壮大で、繊細華麗な装飾が施された大聖堂の起源は、13 世紀にさかのぼります。



当時ヨーロッパでは、ゴシック様式による大聖堂が盛んに建設されていた。フランスを旅していたブルゴスの司教マウリーシオも、その天高くそびえる壮麗な建物を目の当たりにします。そしてこれこそが、カスティーリャ王国の首都であり、司教座もあるブルゴスにふさわしい大聖堂の姿だと確信した。彼の提案は受け入れられ、1221 年、ゴシック様式を導入した大聖堂の建設が始まった。ゴシック様式は際立っていますが、他の建築様式で建てられている美しいものもあります。

基本部分は14世紀初めに完成したが、大聖堂が一層華やかに変貌するのは、ドイツ出身の建築家ファン・デ・コロニアと息子シモンが建設に参加した15世紀でした。火焰装飾(フランボワイヤン)と呼ばれる繊細な装飾を駆使し、透かし彫りの見事な双塔や星形天井を持つ「元帥の礼拝堂」など、大聖堂の至宝ともいべき要素が加えられたのである。

王国の首都は1492年にバリャドリードへ移されていたが、羊毛産業で莫大な富を得た商人階級が王室に代わり、その財を注いで一大事業を成し遂げたのだった。この壮大な大聖堂はその出入り口で有名です。サンタ・マリア出入り口は、正面玄関です。それは13世紀に完成されましたが、18世紀に再構築されました。スルメンタル(Sarmental)出入り口は、1230年ごろに築られました。それはスペインのゴシック様式彫刻の美しい例です。ペジェヘリア(Pellejeria)出入り口は、16世紀にルネサンス様式で建てられました。そして、コロネリア(Coroneria)あるいは使徒たちの出入り口は、13世紀に完成しました。

内部には、13世紀から18世紀にかけて建てられた18の小聖堂が見られます。そして、大聖堂で彫刻、墓など多くの芸術的な貴重品があります。けれども大聖堂で最も素晴らしいのは次の挙げるものです：ルネサンス様式中央祭壇



背後の飾り壁、マウリーシオ司教の墓、ルネサンス様式の聖職者席、ブルゴスのキリスト、エル・シッド(El Cid)と彼の妻の墓。

## 大聖堂の一角に眠る伝道的英雄エル・シッド

豪華絢爛たる大聖堂の翼廊にひっそりとした墓がある。そこに妻とともに眠っている男こそ、レコンキスタの伝説的英雄「エル・シッド」こと、ロドリゴ・ディアス・デ・ビバル

である。

キリスト教勢力とイスラム勢力が割拠していた 11 世紀のイベリア半島。ブルゴス近郊の貴族の家に生まれたエル・シッドは、1065 年、22 歳の若さでカスティーリャ王国の軍総帥になるなど、知勇兼備の騎士として名を馳せていた。しかし、王位継承をめぐる新王との間に確執が生まれ、1081 年には国外追放の憂き目に遭ってしまう。

従えてきた家臣を養うために、彼が新たに仕えたのは、何とサラゴサのイスラム国君主だった。同じキリスト教徒であるバルセロナ伯やアラゴン王の軍隊を相手にめざましい戦績を上げていった彼を、イスラム教徒が称賛し、付けた呼び名がアラビア語で“わが殿”を意味する「エル・シッド」だったのである。

その後、いったんはカスティーリャ王と和解するものの、再び国外追放となった彼は、地中海に臨むバレンシアへと進撃した。今度の戦いはイスラム勢の手から街を奪回するためのものであった。

1094 年、難攻不落を誇ったバレンシアを攻略したエル・シッドだったが、1099 年に当地で没する。この最後の武勲によってキリスト教徒の英雄となった彼の遺骸が、故郷カスティーリャに戻ったのは、1102 年のことだった。



## フロミスタ（サン・マルティン教会）

巡礼路の交差点に建つサン・マルティン教会は、ベネディクト会によって 11 ~ 12 世紀に建造されました。身廊の柱頭には聖書や古典、歴史、逸話などをモチーフにした素晴らしいロマネスク彫刻が施されています。現在は附属教会堂のみとなっています。

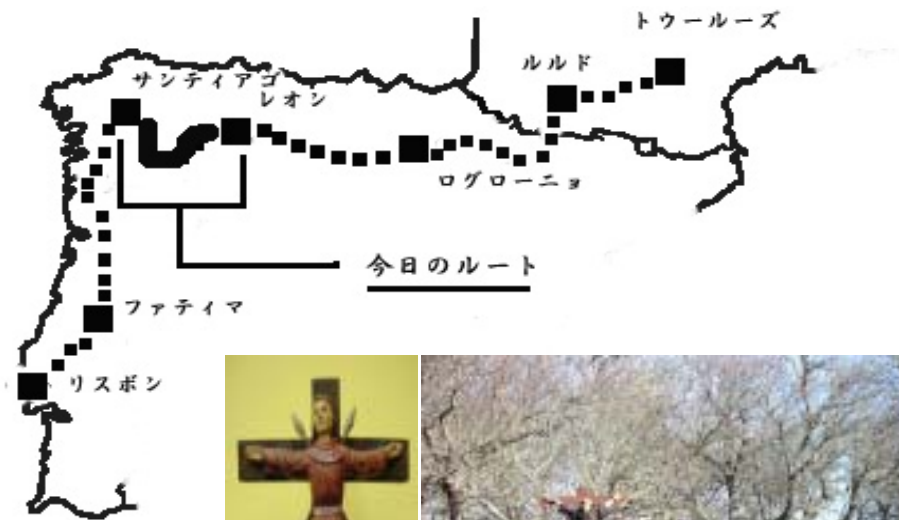


2008年5月18日

## レオン ~ サンティアゴ

今日の巡礼： タメイロン村（聖フランシスコ・ブランコ生地）

（長崎の26聖人の一人）



< 今日も >  
レオン大聖堂、サン・イシドロ教会  
聖ヨセフの居住施設（御ミサ）、ブルガス噴水



## レオン大聖堂

サンタ・マリア・デ・レオン大聖堂（「光のハウス」とも呼ばれる）は、800年後にオルドニョ 2 世国王が宮殿に換えた、2 世紀のローマの公衆浴場の所を基盤として作られました。この大聖堂はゴシック様式の傑作です。13 世紀から 15 世紀にかけて建築されました。



最も魅力的な特徴のひとつが西ファサドにある 3 つの塔（2 つの鐘楼と 1 つの時計塔）です。そして、最も素晴らしい作品の 1 つが身廊を照らす 1800 平方メートルのステンドガラスの窓です。それは、125 枚のパネルと 57 枚の円形モチーフに分かれている。



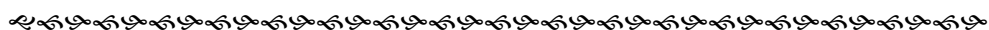
大聖堂博物館には神聖な芸術の大きいコレクションがあります。 マリア様の50のロマネスク様式の彫刻、モザラベ聖書、そして、多数の写本を含めたおよそ1500もの美術品があります。

## バシリカ・デ・サン・イシドロ

バシリカ・デ・サン・イシドロは、フェルナンド1世とサンチョ1世によって、1054年から1067年の間に建てられました。 聖イシドロの遺物がすでにこの教会にあったため、両方の国王がこの新しい聖堂を聖イシドロに捧げることに決めました。 このバシリカは、ロマネスク様式で、壊された洗礼者ヨハネと聖ペラヨ教会の上に建てられました。

国王のパンテオンの天井と壁は、スペインのロマネスク様式のフレスコ画の最も美しい例のひとつです。 天井は3つの部分で分かれており、フレスコ画は完全にそれを覆っています。

中心の上にキリストが描かれています。そして、そばに4つ福音史家（羽を持っている男としてのマタイ、雄牛としてのルカ、ライオンとしてのマルコス、ワシとしてのヨハネ）も描かれています。



## オウレンセ

1. ブルガス噴水
2. プエンテ・ロマノ
3. サント・クリスト



## 聖フランシスコ・ブランコ

---

フランシスコ・ブランコは、1570年頃、スペインのガリシア州、タメイロン村に生まれた。家族は経済的に恵まれているので、フランシスコは子供の時から豊かな教育を受けました。10歳頃、ヴェリン町にあるイエズス会のモンテルレイの学校に入った。ヴェリンで初めてフランシスコ会と出会いました。



彼は卒業してから、法律学を学ぶためにサラカンカに行きましたが、そこで再びフランシスコ会と出会ったので、その会に入りました。17歳の時でした。

その後病気にかかり、なかなかその病気が治らないため、ポンテヴェドラのガリ

シア海岸に移ったが、体力はますます衰えていった。

1592年に南米、フィリピン、そして、日本に宣教するためにスペイン中で宣教師が集められました。フランシスコ・ブランコはその団に加わりたかったが、病気のためできませんでした。しかし、彼はその希望を失いませんでした。フランシスコは聖ナルレテの墓を訪れ、9日間その墓の上に寝て、元気になり、そしてフィリピンへ行くグループに入りました。自分の生まれた村を経て、「銀の道」に沿って歩いて、セヴィヤに至りました。

1593年1月9日、船はメキシコに向けセヴィヤから出帆した。数ヶ月後、サン・ファン・デ・ウルア港（メキシコ）で下船して、メキシコシティの近くにあるチュルプスク修道院まで歩いて行った。そこで、待つ間の1593年末頃、司祭になった。

1594年1月の半ば、フランシスコ会の46名の宣教師はアカプルコ港で船に乗って、3ヶ月後マニラに着きました。フランシスコはそのグループの中のひとりであった。彼は、マニラの聖フランシスコ修道院で再び神学を学び続けた。

その時、日本から良いニュースがあって、管区長はマニラで働いている宣教師の中から何人かを選んで日本に送り出すということを決めた。出発するまで、選ばれた宣教師たちは日本語の勉強を始めた。フランシスコは選ばれなかったが、日本語を勉強するグループに入りました。

ところが出発の計画が急に変わりました。選ばれた宣教師全員を集めることができなかったので、そのうちの一人に代わってフランシスコは船に乗った。1596年6月末長崎に着いた。

フランシスコは京都にある修道院に配属された。そこで、子供たちにカテキズムを教え、貧しい人たち（とくにらい病を患っている人たち）の世話をしていた。



しかし、1596年12月8日に太閤・豊臣秀吉による迫害が始まった。軍はフランシスコ会の修道院を取り囲んだ。フランシスコは、左の外耳を切り落とされ、1597年1月2日、裸足で大阪から長崎までの旅を始めた。そして、1597年2月5日、長崎の浦上で十字架にかけられた。

一緒に殉教した26名は1627年7月19日に教皇ウルバノ8世によって列福されて、1628年に、まだフランシスコの親類と友人が生きている時、タメイロン教会共同体は初めて聖フランシスコ・ブランコの祝日を祝いました。その荘厳ミサの司祭式者はフランシスコ・ブランコの兄弟であった。そして、1892年6月8日に教皇聖ピオ9世によって列聖された。

のちに信徒たちは26人が殉教した場所に、26本の椿を植えました。そして、200年後、椿の花は、フランシスコ・ブランコが出発したところ「リアス・バイシャス」に植えられて、今では“Rias Baixasの花”と呼ばれます。

“主よ、もし、千生命を持つとすれば、  
全部、あなたの愛のために差し上げたい。

いま、この持っている命を  
感謝しながら喜んで差し上げます。”

(フランシスコ・ブランコの最後の言葉)



2008年5月19日

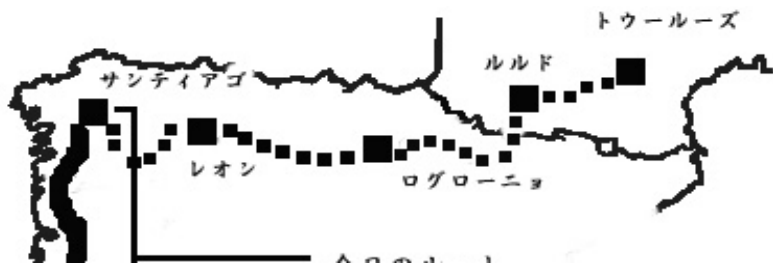
## サンティアゴ ~ ファティマ

今日の巡礼： サンティアゴ・デ・コンポステラ

栄光の門から入って心で感謝する。

まっすぐ進んで祭壇裏の階段を上って、聖ヤコブ像を抱く。

それから、祭壇の下にある聖ヤコブの墓を訪問する。





< 今日も >

サンティアゴ・デ・コンポステラ旧市街（世界遺産）



## サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂

サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂は聖ヤコブ（サンティアゴ）、  
イエス様の12使徒のひとりの埋葬場所です。  
それは中世から「サンティアゴの道」の目的地である。

コンポステラ：（campus stellae = 星の畑）（compositum tellus = 美しい所）

## 歴史

伝説によれば、使徒聖ヤコブはイベリア半島でキリストのメッセージをケルト族にもたらしめました。西暦 44 年に彼はエルサレムで首を切り取られ、その遺体は再びスペインに運ばれて埋葬されたといわれている。そして、キリスト教徒へのローマによる迫害のために、彼の墓は 3 世紀には見捨てられていました。



また 813 年、現在のサンティアゴ・デ・コンポステラで、隠者ペラギウスは天使のお告げによりヤコブの墓があることを知らされ、星の光に導かれてテオドミロ司教と信者がヤコブの墓を発見したとされる。これを記念して墓の上に小聖堂が建てられた。

その後、829 年に、初聖堂が建てられ、899 年にレオン国王アルフォンソ 3 世によって前ロマネスク様式の教会がたてられた。

997 年に、この教会はコルドバのカリフの陸軍指揮官モハンメッド・アミールによって焼き払われた。教会の門と鐘は、コルドバ市にキリスト教徒の捕虜によって運ばれて、アルハママスクに加えられました。そして、1236 年には、これらの同じ門と鐘はトレド大聖堂に加えられるために、この時には回教徒の捕虜によってトレドに運ばれました。

現在の大聖堂の建設は 1075 年に始まりました。そして、1128 年に神聖化されました。この大聖堂は花崗岩で建てられています。大聖堂は長さ 97 メートルと

高さ 22 メートルである。この大聖堂は、その途方もない大きさからも、スペインで最も大きいロマネスク様式の教会です。

## 4つのファサド

**西ファサド**（オブラドイロ広場のファサド）は、1738 年から 1750 年の間に作られました。このファサドは 2 つの塔（高さ 76m）に両側を挟まれています。左の塔はゼベダイ、聖ヤコブの父の像を示します。そして、右の塔（鐘の塔）はマリア・サロメ、彼の母親の像を示します。

ファサドの上の部分には、巡礼者のように着飾る聖ヤコブと彼の 2 人の弟子アタナシオとテオドミロの像を示されています。

**北のファサド**は、インマクラダ広場に通じています。ここで、サンティアゴの道は終わります。ロマネスク様式の門（パライソ = 天国の門と呼ばれる）は 1122 年に建てられました。

キンタナ広場に面している**東のファサド**は、まったく異なった光景を見せます。そこには、2 つの門があります：「神聖な門」と「ロイヤル門」。神聖な門は、神聖な年だけ開かれます。つまり神聖な年とは、7 月 25 日「聖ヤコブの祝日」が日曜日に当たる年です。

サンティアゴ・デ・コンポステラの神聖な年といわれるようになったのは、12 世紀に始まります。1119 年に教皇カリット 2 世によって特別な恩典が与えられました。この恩典とは、サンティアゴ・デ・コンポステラをローマとエルサレムと同じ聖レベルに引き上げるというものです。

ロイヤル門の名の由来は、その門の上にある皇族の紋章から来るものです。



南のファサドは、昔は銀の宝石が売られたところで「プラテリ阿斯広場」に位置しています。銀細工の門といわれるこの門は聖書に出てくるさまざまなエピソードを素材にした彫刻で飾られている。有名なアダムとイブの楽園追放を描いた部分には、特に興味をひかれる。

## ポルティコ・デ・ラ・グロリア

オブラドイロ広場に面する西のファサドの入り口から入ると12世紀の栄光の門（ポルティコ・デ・ラ・グロリア）があります。大聖堂のなかでも主要な美しいもののひとつです。巨匠マテオによって1168年から1188年の間に作られたロマネスク様式の彫刻の傑作です。



門の中央の支柱には聖ヤコブの像があり、遠くからの旅を終えた巡礼者はその支柱に手をつけて巡礼の旅の達成を感謝する。巡礼者は、頭を3回、像に接触させる人は誰でも知性と優れた記憶を与えられるであろうと言われます。

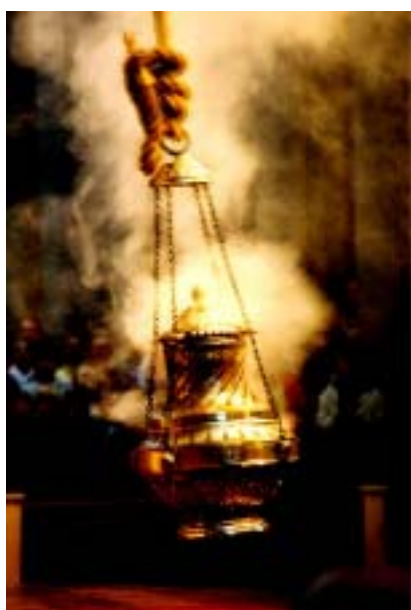
## 地下聖堂

主祭壇の下には、地下聖堂があり、9世紀の教会の基礎を示します。この地下聖堂は巡礼者の最終の目的地である。地下聖堂には聖ヤコブと彼の2人の弟子（聖テオドミロと聖アタナシオ）の異物が置かれています。

1884年に、その遺物は教皇レオ13世によって確認されました。後に銀聖骨箱は地下聖堂に入れられました。

## ポタフメイロ（香炉）

この大香炉は 1851 年にホセ・ロサダによって作られました。サンティアゴ・デ・コンポステラの大香炉は、80 キログラムの重さがあって、そして高さは 1.60 メートルの大きさがあり、世界中で最も大きい香炉です。それは大聖堂のライブラリに展示されています。



しかし、重要な式典の際、主祭壇の前では、ポタフメイロと呼ばれる大香炉で香が焚かれる。40 キログラムの木炭と香料で満たされたその大香炉は滑車メカニズムに付けられます。8 人（チラボレイロス）によってロープを引っ張って、そして 60 km/h のスピードに達して、大聖堂の中に香料の雲が広がる。

12 世紀ごろ、長旅を終えた巡礼者が聖堂内に寝泊まりしていたため、こもる汗の臭いを消して聖堂内の空気を浄化するために始められたその習慣が、14 世紀以後に宗教行事となりました。

## サンティアゴ旧市街

サンティアゴ・デ・コンポステラ旧市街は 1985 年 12 月 4 日にユネスコの世界遺産に指定された古くからの歴史ある街で、サンティアゴ街道を歩いて、聖ヤコブの墓所を訪れる多数の巡礼者を迎え入れるために生まれました。ロマネスク様式、ゴシック様式、そしてバロック様式の建物で、サンティアゴ市は世界の最も美しい都市のひとつです。最も古い建物は聖ヤコブの墓と大聖堂の周りにまとめられます。

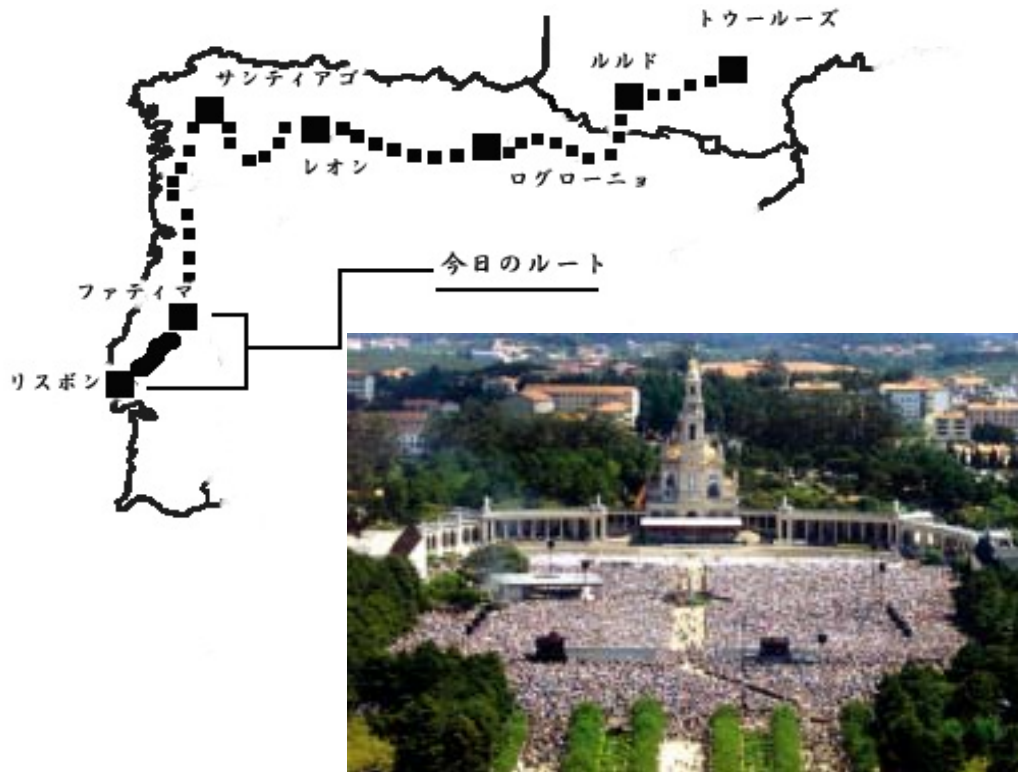
そして、サンティアゴ・デ・コンポステラは、イスラム教に対してスペインのキリスト教徒の争いでシンボルになりました。10 世紀の終わりに回教徒によって破壊されて、それは次の世紀に完全に再建されました。



2008年5月20日

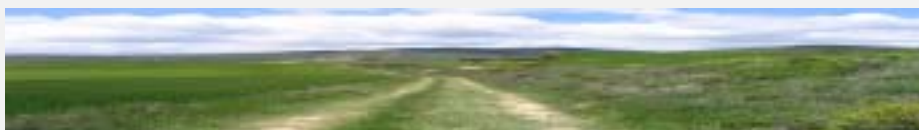
## ファティマ ~ リスボン

今日の巡礼： ファティマ



< 今日も >

バターリャ修道院（世界遺産）  
トマールのキリスト教修道院（世界遺産）  
リスボン（観光ルート）



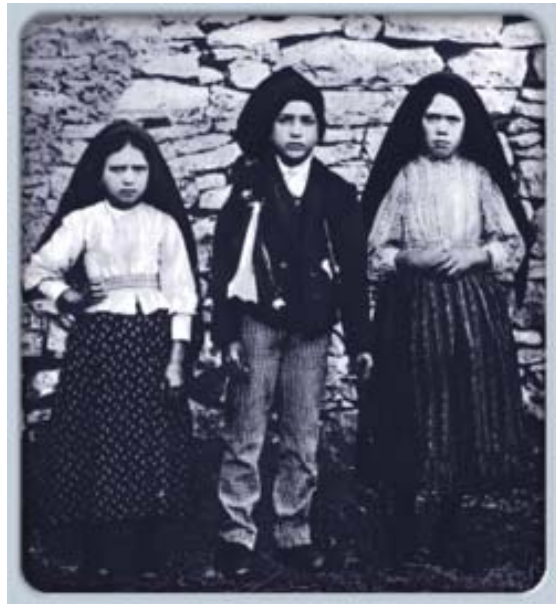
## ファティマの奇跡

---

ファティマの奇跡とは、第一次世界大戦中の 1917 年ポルトガルのファティマという小さな村で起こった出来事である。

リスボンの北東 100 キロほどのところにあるファティマという小さな村で、1917 年 5 月 13 日、この小さな村に住んでいる 3 人の子どもたちに奇跡が起きた。その子どもたちとは、フランシスコ(9歳)とジャシнта(7歳)の兄弟、それにそのいとこにあたるルシア(10歳)だ。

その日、貧しい羊飼いの牧童である 3 人は羊を連れて、村から 2 キロ先のコバ・ダ・イリアという窪地にやって来た。すると、その時、突然、空に閃光が走り、卵形の物体が降下してきたかと思うと、3 人の目の前に聖母マリアが姿を現したのだ。そして、これから五ヶ月間、毎月 13 日の同じ時刻にこの場所に現れることを告げて消え去った。3 人は秘密にすることを約束したが、一番小さなジャシнтаは母親に問い詰められて話してしまった。そのため 3 人は村中の笑い者になった。



翌月の 6 月 13 日、3 人の子どもの話を確かめるために、数人の村人がその場所に集まった。村人たちはこの時、卵型の光る物体が降下してくるのしか見えなかったが、3 人の子どもたちにはやはり聖母マリアの姿が見え、声が聞こえた。疑っていた村人たちも、卵型の物体を見たため、何かがおきているらしい、ということを感じるようになった。

こうしてこの話は近隣の町や村へ伝わっていき、最後の出現の日である 10 月 13 日には、国中から 7 万人ぐらいの人々が集まった。



その日、3 人が祈ると、それまで降っていた雨が突然やみ、太陽が 7 色に輝いて、みんなの上空で跳ね回り乱舞した。そしてそれは人々の上に急に落下してきて、人々の上に落ちる直前にぴたりと止まり、みんなは恐怖におののいた。その後また太陽は舞い上がり、天空を踊るようにかけ回った。

そして、聖母マリアはやはり 3 人の子どもだけに聞こえる声で、この地に礼拝堂を建てるように言い、三つの予言を告げたのだ。一つは「第一次世界大戦の終結」。二つ目は「第二次世界大戦の時期と核兵器の出現」ということだった。この二つの予言は、25 年後の 1942 年にバチカンから発表された。

### その後のファティマの牧童たち

3 人のうち 2 人は、聖母の預言したとおり、すぐに帰天した。1919 年 4 月 4 日、フランシスコは帰天した。1920 年 7 月 20 日、ジャシントは帰天した。聖母は彼女のもとに何日も現われました。彼女もまた聖母の願いを忠実に守り抜きました。ジャシントとフランシスコはヨハネ・パウロ 2 世により 2000 年に列福された。

ルチアは、その後孤児院に入り、1925 年聖ドロテア修道女会に入り、1948 年カルメル会の修道女になった。シスター・マリア・ルチアは、2005 年 2 月 13 日、97 歳でコインブラの修道院で帰天した。

そして三つ目の予言は 1970 年になっても発表されなかった。なぜなら。第三の予言を読んだ教皇パウロ六世が、内容の重大さにショックを受けて卒倒し、「これは人の目に絶対に触れさせてはならない。私が墓の中まで持っていく」といって、発表を差し止めてしまったからである。その時から第三の予言は秘密文書として、バチカンで厳重に秘匿されてあった。

しかし、2000 年 5 月にその三つ目の予言は、1981 年 5 月 13 日の教皇ヨハネ・パウロ 2 世の狙撃事件を予言したものであったことが発表された。



これがファティマの奇跡であり、1920 年代後半からこの地への巡礼が盛んになり、1930 年にはファティマは聖地として認められたのだ。

### 聖母マリアからのメッセージは大きく 3 つあった。

1. 罪から回心しなければならないということ。
2. 人類の危機：戦争の問題。新しい武器が戦争で使用されることによって、人類が瞬時に滅ぼされる可能性です。
3. 教皇暗殺の危機：1981 年 5 月 13 日の事件をヨハネ・パウロ 2 世は、東欧の政権による暗殺未遂と発表している。

### 聖母マリアから教皇への要望は大きく 2 つあった。

1. ロシアの回心：貧しいロシアとその衛星国を、圧迫ではなく救済することで、神の審判を回避すること。
2. ロシアの奉献：ロシアを聖母に奉献し、ロシアの保護下にある世界中の貧しい国々へ聖母による保護をもたらすこと。

# バターリャ修道院

---

バターリャ修道院は、ドミニコ修道会の修道院である。ポルトガルにおける後期ゴシック建築の傑作であり、マヌエル様式も用いられている。バターリャ修道院は、切妻屋根、尖塔と小尖塔、控え壁によって多くの人々を驚嘆させる。



## 世界遺産

登録名： バターリャ修道院

登録年： 1983年

登録区分： 文化遺産

バターリャ修道院は、ポルトガルの独立を象徴する建築物であり、1983年、ユネスコの世界遺産に登録された。

## 歴史

正式名聖母マリア修道院で知られるバターリャ修道院は、1385年8月14日、バターリャ近郊で行われたアルジュバロータの戦いで、カスティーリャ王国軍をジョアン1世が打ち破ったことを聖母マリアに感謝するために建設が開始された。アルジュバロータの戦いは、1383年からカスティーリャ王国とポルトガルとの間で展開された戦争において、ポルトガルの勝利を決定付けた戦いとして知られ、バターリャとはポルトガル語で「戦闘」を意味する。

修道院は、2世紀にかけて（1386年から1517年まで）建設された。その建設には15人の建築家が携わった。修道院の外装は、石灰岩によって構成されており、時が経過するにつれて、黄土色へと変色していった。

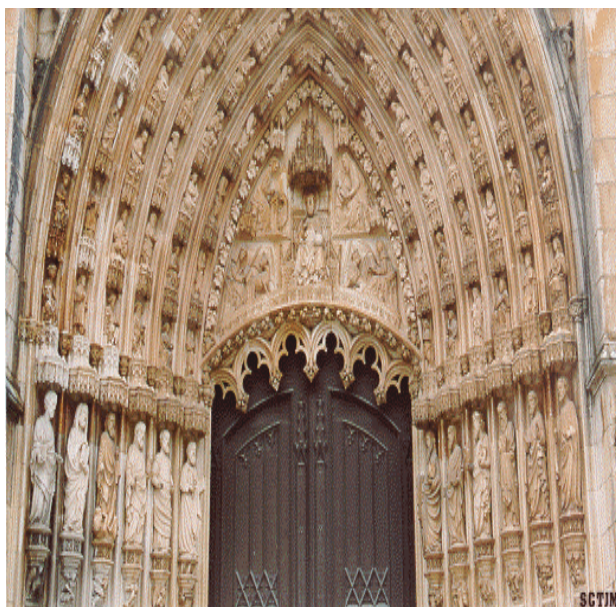


バターリャ修道院は、1755年のリスボン大地震によって損害をこうむったが、これよりも多くの被害を受けたのがナポレオン配下の将軍アンドレ・マッセナによる破壊である。半島戦争がイベリア半島で展開された1810年から1811年にかけて、バターリャ修道院は多くの被害を受けた。また、1834年には、ドミニコ修道会がバターリャ修道院の建築物群から追放されると、修道院は放置され、廃墟と化した。

1840年、フェルナンド2世がゴシック建築の傑作であるバターリャ修道院の修復を宣言し、その作業は、20世紀の初めまで続いた。1980年には、修道院は博物館へと転換された。

## 入口

西側の広場に面している修道院の入口は、アーチ・ヴォールトの形をとっており、そのヴォールトの中には、78体の聖像が飾られている。78体の聖像は6列に分けて並んでおり、それぞれに旧約聖書に登場してくる王、天使、預言者、聖者が天蓋の下に並んでいる。また、ヴォールトから地面へとつながる部分の両脇には、使徒と鎖で縛られた悪魔の彫像がある。加えて、修道院の入口のアーチ・ヴォールトの上部の三角形のような形をしたスペースには、キリストの戴冠の様子が彫刻で施されている。



## トマールのキリスト修道院

ポルトガルの首都リスボンから北東へ 143 キロ余り離れたトマールは、ナバン河畔の緩やかな丘陵に抱かれた人口 1 万 5000 人ほどの美しい町です。穏やかで明るい雰囲気をもつ市街地を見下ろす丘の上に堅牢な城壁とともに建つのが、世界遺産に指定されているキリスト教修道院です。

リスボンのジェロニモス修道院やバターリャの修道院とともに、海などに関するものをモチーフとした装飾を施したマヌエル様式の最高傑作と目されています。

### 世界遺産

登録名： トマールのキリスト教修道院

登録年： 1983 年

登録区分：文化遺産



12 世紀に Templar 騎士団が築いた城塞に始まったこの修道院の「城下町」として、トマールは長い歴史を歩みました。第 1 回十字軍によって聖地エルサレムが奪還された後、12 世紀初めに創設された Templar 騎士団は、1139 年に教皇から正式な認可を得て教皇直轄の軍事集団となり、数々の特権を与えられました。騎士団はヨーロッパ各国の王から土地を授かり、各地に拠点を置きましたが、トマールもそのひとつです。

レコンキスタ(国土回復戦争)のなかで 1157 年、騎士団はポルトガル中部の拠点サンタレンをイスラム教徒から奪回。その功績に対し、ポルトガル国王アフォンソ 1 世から与えられた土地がトマールです。

12 世紀末に建立された教会は、エルサレムの建築に影響を受けたムデハル様式による十六角形プランのシンプルなものですが、外壁に銃眼が配されるなど、要塞のように防御が固められました。



トマールをイベリア半島における重要拠点とした騎士団はその後、レコンキスタで大きな役割を果たし、国王よりさらに広大な土地を得ました。しかし、強い軍事力と莫大な財産を誇った騎士団を、脅威と見る勢力もあったのです。特に、財政難に陥っていたフランス国王フィリップ 4 世は、自分の意のままになる教皇クレメンス 5 世と謀って騎士団に異端の嫌疑をかけるなど、さまざまな手を使い、1314 年までに騎士団を解散へと追い込みました。こうしてフラン

スでは指導者が処刑され、財産が没収されたテンプル騎士団ですが、ポルトガルでは国王ディニス 1 世(在位 1279 ~ 1325 年)が団員の逮捕を拒否した。トマールを本拠とするテンプル騎士団はそのままキリスト騎士団と名を変え、その存続が認められました。

15 世紀後半には、マヌエル 1 世は、王に即位する前にキリスト騎士団の団長に就任し、トマールに住みました。マヌエル 1 世は莫大な資金を注ぎ、当時の建築様式が色濃い建物を修道院に加えています。

16 世紀、ジョアン 3 世の治世に入ると、騎士団の軍事的な性格は弱められ、建物もシトー会修道院としての機能を重視したものに改装されました。

こうして 5 世紀にもわたって増改築が続けられたトマールのキリスト教修道院ですが、その後は没落の時代を迎え、少しずつ重要性を失っていきました。





メモ帳

Horizontal lines for writing, forming a memo pad.